日本の田舎暮らし

バルバラ数井

Barbara Kazui（旧姓 Napierała）
1988 年ポズナン市に生まれる。ポズナンのアダム・ミツキェヴィチ大学地理学科と日本学科を卒業。2009 年初来日。2012 年北海道・キロロリゾートで 1 年間のインターシップ、2014 年キロロリゾートに就職、結婚、二児を出産。余市郡赤井川村在住。

五、六年前に誰かに、どこに住みたいですかと聞かれたら、わたしは間違いなく「日本」と答えたでしょう。今もし同じように聞かれたら、わたしの答は「北海道」でしょう。この変化はどこから来たのでしょうか。それは「郷土愛」とも呼べるでしょう。

五年前キロロリゾートで働きはじめたとき、この辺りで何年も暮らそうとは、そしておそらく永住しようとは考えもしませんでした。ここに自分の居場所が見つかるとは思ってもみませんでしたが……。

わたしは世界の果てと思われている、四方を山（カルデラ）と野原に囲まれた小さな村に住んでいます。毎朝起きると窓の外のとても美しい風景に驚かされます。白い雪に覆われた冬景色だけではありません。春も、夏も、秋も、自然は緑、赤、黄金と、ありとあらゆる色彩に満ちています。

ここは「天国」のように思えるでしょう。それはほぼ間違いありません。「天国」のように、ここには美しい風景のほか何もありません。家族も、知り合いも、友だちもいません。

村の人々はとてもいい人たちで、仲良くしてくれますが、農作業に忙しく、産休中のガイジンに関わっている暇はあまりありません（これは夏の話で、冬は豪雪で誰も外に出ません）。二児の母として、わたしは一年の休暇をいただき、子育てのほかに、村の隅々まで研究し尽くしました。

話を戻せば、村の人々はいつも忙しいですが、ちょっとおしゃべりの機会があるといつも「暮らしには慣れたの」と聞かれます。わたしは正直に「大丈夫です。夫はやさしいし、食べ物はおいしいし、気候は似ていて、こういう静かで平和な田舎暮らしをずっと夢見ていたのです」と答えます。「そうです！気候と食べ物はそっくりです！わたしたちもお米を食べるし、北海道でもジャガイモを食べるでしょ」と笑いながらご近所の方に答えます。

人口 1300 人ほどの小さな村ですが、住民は外国人に慣れていて、外国人に指差ししたりしませんし（沖縄を旅したときはよくありました）、日本語で話しても驚きません。正直いって、わたしは突然ポーランドの村に移されても、違いに気づかないでしょう。

わたしの大好きな村には何があって、何が無いかという話に戻りましょう。

すでにお話ししたとおり、産休の間にわたしは「田舎暮らし」という概念を完全に理解しました。5 月から 11 月までベビーカーを押し2頭の犬を連れて村とその郊外をくまなく歩きました（人口は少なくても、村は 20km 以上に広がっていて、歩く場所はたくさんあります）。一日に 10～15 km も散歩したこともあって、村の住人すべてと顔見知りになりました。残念ながら、まだ親しいお近づきではありませんが。

わたしたちは普段、暑さを避けるため朝早く出かけます。ポーランドでこういう地方に住んだら、山歩きをするのが普通ですが、残念ながら、熊のため山歩きは禁じられています。そう、熊がいるのです！はじめてその話を聞いたときはたいへんなショックでした。「熊がそんなに人間の近くに来るはずがない」と思っていましたが、通い慣れた道の、家のすぐ近くで熊の糞を見つけたのです。それ以来わたしは熊除けの鈴を身に着けています（熊はこの鈴の音が嫌いだそうです）。最初はそれが何の役に立つのか分かりませんでしたが、近所に熊がいるかも知れないので、熊を避ける方法を村の人に教えていただき、経験に学ぶことができました。

わたしの散歩コース上のもう一つの重要ポイントは、この地域で唯一のお店であるセイコーマートです。ちょと誉め言葉をいえば、これは最近までポーランドには無かった、日用品がなんでも揃う便利なお店で、値段は店が決めるのではなく、定価です。さらに、必要なものは（オムツを含めて）何でも揃うし、セイコーマートはあらゆるコンビニのなかでいちばん安いのです。そこで、わたしたちはセコマに寄って……この散歩でいちばん大事な、アイスクリームを買います。

おそらく世界中どこにも無いことでしょうが、ステ

ィック付きのおいしいアイスが一年中買えるのです。わたしの夢が叶ったのです！ポーランドには友だちや家族を家に呼んでコーヒーとケーキやアイスクリームをふるまう習慣があって、皆は「お客さんが来る」といって、よく同じ風味のアイスを大きな箱一杯買います。ただ、それでは次の2週間に食べ飽きることがあります。それより小さいスティック付きのアイスのほうが、誰でも好きなものを選べます。違う種類のアイスを二個食べたいですか。いいですよ。誰でも二個食べてください。アイスクリームが夏だけでなく一年中手に入るのは驚きですが、そのうえ季節ごとにアイスは変わります。数ヵ月ごとに棚の構成が変わり別の風味が味わえるのです。

食べ物の話では、わたしたちのセイコーマートでする小さな買い物のほかは、車で25分ほど離れたスーパーで買います――山から海へ、ちょっと下ればいいのです。スーパーでは、いちばん重要な買い物をします――パン、肉、魚など……以上です（品物のリストの順番にもご注意ください――ポーランド人だという明らかな証拠です）。

田舎暮らしのもう一つの魅力は、村で買ったり頂いたりする（少なくとも夏の）野菜や果物、そしてお米です。そう、頂くのです。ご近所の農家の方とよい関係を築くことができれば、ときどき、売り物にならない規格外の野菜（傷ものや、形の悪いものなど）をどっさり頂けます。もちろん、味は売りものに引けを取りません。日本では、野菜も果物も安くはありませんが（たとえば、日本ではリンゴ一個が――季節と品物によって――90～190円もします。ポーランドなら、リンゴ1kgか、ときにはそれ以上買えるでしょう）、田舎に住んでいれば、それらを保存し、調理し、下ごしらえして、通常の店では手に入らなかったり、財政的に手の出ないような、瓶詰め、ジャム、ソース、冷凍食品、その他の料理をつくることができます。そのうえ、気候がポーランドと似ているので、北海道では故国と同じような野菜が手に入ります――たとえば、入手のむずかしいビーツさえ手に入るのです。

アイスクリームを食べて野菜売り場を巡ったら、わたしたちは野原のほうへ行き、至福の静寂に浸ります。赤ん坊はベビーカーで眠り、犬たちは牧草地を駆け回り（都会と違って、ここでは彼らは自由で、誰の邪魔にもなりません）、わたしはスカイプでポーランドにいる家族の誰かとおしゃべりします。この魔法の土地のもう一つの重要ポイントは、ここは「地の果て」ですが、電波とインターネットは何の問題もなく届くことです。

まとめると、北海道の田舎には何も無いけれど……何でもあるのです……。ここにはお店も、騒音も、喧噪も無く、静かで、平和で、美しい風景があります。大都会の無関心や危険は無く、素敵な人々がいます。20分でスキーリゾートがあり、20分で日本海のビーチです（自動車を買い込むのをお忘れなく。村の住民には欠かせないものですから）。お祖母ちゃんや友だちと飲むコーヒーや、チーズ&ハムサンドはありませんが、やさしい夫と二人のやん茶坊主とたくさんの食べ物――典型的な日本食材とは限りません――があります。こうしたものすべてがあるので、わたしにとってここはかけがえのない土地です。

わたしのイエは北海道です。　　（安藤厚訳）

（右上写真・奥は、道の駅あかいがわ）

北大祭 IFF2017 ポーランド料理テント“Polski Namiot”

手作りのポーランド料理はいかがですか!

2017年6月2日（金）12:00～22:00、3日（土）9:00～22:00、4日（日）9:00～17:00、北大総合博物館（北10西8）付近に出店

日本では普段は食べられないおいしいポーランド料理を食べにきてください。

（写真は昨年の様子。ギター伴奏でポーランドの歌を紹介。）

北海道大学ポーランド人留学生会
協賛：ポーランド広報文化センター
後援：北海道ポーランド文化協会

ポーランド広報文化センター
INSTYTUT POLSKI TOKIO